北星短大紀 *Journal of Hokusei Jr. Col. Vol. 34 : 13－25, 1998*

現代女性作家が綴るアメリカ西部の物語

－The Stories That Shape Us: Contemporary Women Write about the West を中心に－

The Stories of the American West Narrated by Contemporary Western Women Writers

吉 田 かよ子
Kayoko Yoshida

ABSTRACT

The Stories That Shape Us: Contemporary Women Write about the West is an anthology of selected essays and stories narrated by contemporary western women writers. These writers' diverse ethnic as well as regional, cultural and religious backgrounds make these stories successful in illustrating how the land and the spirit of the West have shaped women of the American West.

The objectives of this paper are to attempt to place this anthology in the context of the studies of the American West and to look into some women authors from uniquely Western "tribes," namely, cowgirls, native Americans, and Mormons. An attempt is also made to explore the spiritual meaning of the land in the West to those who live there, through a close reading of an essay called "Getting to Hope."

Even though their background varies extensively, there are commonalities in almost all writings included in this anthology. These are the stories of women trying to become independent from their respective "tribal" family and to establish their own identity. The strongest support they have received in the process was the existence of the land of the West itself in which they were born and raised.

key word: Contemporary Women of the West, American West, New Western History, Western Women Writers

1．はじめに　ー　アメリカ西部の語り部としての女性たち

No story has shaped American culture more than the Winning of the West.

Teresa Jordan

アメリカ文化の形成に西部の獲得以上に寄与した事柄はない。－というテレサ・ジョーダンの宣言に大きな異議を唱える人は少数だろう。アメリカ建国以来、絶え間なく続いた西進運動とフロンティアの克服がアメリカという国家とアメリカ人の信条に与えた影響については、多くの歴史家の手によってすでに自明の事となった。

しかし、西部の獲得という発想は、それ自体が主として東部からの白人男性による西部の大自然の征服と先住民族の駆逐という視点に立つものであった。1980年代になって、これに疑問を呈する新西部史家と呼ばれる研究者たちが脚光を浴びるようになった。西部と総称される地域に存在する独自の多様な文化や人々に焦点を当て、アメリカ文化の形成に決定的な影響を持ったとされるこの地域の豊かさや危うさに迫ろうとする彼らの姿勢は、それまでの一元的な西部観を一挙に覆えす力強さに満ちたものだった。(1)

そうした時代の流れと、女性研究の隆盛が相まって、西部に生きたさまざまな女性たちの残した文献やオーラルヒストリーの研究が活発に展開されるようになったのである。ここにその内容を紹介する *The Stories That Shape Us: Contemporary Women Write about the West* は、男性に代わる西部のいわば語り部（かたりべ）としての現代女性作家たちの作品を集めて1995年に出版されたアンソロジーである。

編者の一人であるテレサ・ジョーダンは、新西部史派の薫陶を受けた作家であり、なによりもワイオミングの牧場に育った生粋の誇り高い西部の女性である。ジョーダンともう一人の編者であるジェームズ・ヘップワースは、現代の西部の女性作家の作品の中から、26編を選びここに収録している。その中には現代アメリカ作家の最高峰の一人とも目されるマキシン・ホン・キングストンのように、すでに名を成した作家もいるが、初めてその作品が世に出るという作家も含まれている。

ジョーダンは収録の基準として、できる限り多様な背景を持つ作家を選ぶと同時に、その作品がどれだけ西部的であるかを常に問うたと前書きに記している。26人を特徴的な背景別に分けてみると、大平原州から北はアラスカ、南はアリゾナの各地に生きる白人女性が13人、同じ白人女性でもユタ州のモルモン教徒として他の西部地域とは文化的に全く異なる文化圏に属した３人、西部開拓の征服と従属の直接の対象となった先住民族女性が３人、アジア系女性が３人、メキシコ系女性が２人、それに黒人女性とユダヤ系女性が各１人となっている。

それぞれが、西部の異質な環境の中で生きてきた極めて個人的な経験をもとに綴る物語は、家族や地域社会との強い絆の中であれ、人種や性による偏見との戦いの中であれ、常に厳しい自然環境と向き合って生きることを強いられた女性の自立というテーマと、西部の土地の持つ精神性が縦横の糸となって鮮やかに織りなされている。すぐれた語り部としての彼女たちの手になる作品の中に、歴史に閉じ込められた西部ではなく、現代の人間たちを包みこむ西部を実感できるのである。

本論ではすべての作品を紹介することはできないが、特に印象深かった作品の中から、ジョーダンに代表されるカウガールズー大平原州を駆ける牧場の女性たちー、先住民族女性の強要された文化受容の痛ましい過程、そしてモルモン女性の宗教からの自立を扱った作品を取り上げていく。最後に、ホープというダコタの小さな町の長老派教会を中心に、大地に生きる地域の

人々を描いたキャスリーン・ノリスの『ホープに向かって』は部分的な訳出を試みながら紹介することにしたい。

2．カウガールズ　ー　テレサ・ジョーダンとその世界

The Stories That Shape Us の編者でもあるテレサ・ジョーダンは、ワイオミング州南東部のアイアン・マウンテン郡の牧場経営者の4世代目にあたる。ジョーダンが一躍脚光を浴びたのは、1982年に初版された「カウガールズ－アメリカ西部の女たち」(*Cowgirls: Women of the American West*) によってである。

カウボーイがアメリカ西部を代表するいわば国民的偶像として、全米にそして世界中に喧伝されたのに対し、開拓の初期から同様に馬を駆って牛を追った女性たちの存在はほとんど西部史上に取り上げられる事はなかった。1970年代までのアメリカにおける西部開拓時代の白人女性のイメージは、トレイルを行く聖母－マドンナ－のそれであり、土地と格闘する夫の背後で家庭を守り、子供を育て、家族の精神的そして道徳的支柱として存在する気高い婦人という西部神話の枠を出る事はなかったのである。しかし、実際には彼女たちの多くが悲惨で過酷な運命に翻弄されたことは、70年代以降の当時の文献研究などで次第に明らかになっていた。(2)

ジョーダンの「カウガールズ」の功績は、こうした大平原のマドンナたちには、より冒険的な姉妹たちが存在したことを明らかにしたことにある。過去のアイコン（偶像）の実像を現代に伝えるという作業の中では、ややもすると暗く否定的な過去の再構築は現代社会とは隔絶した歴史の再評価に留まりがちである。しかし、ジョーダンは自分自身を育んだワイオミングの大地と4世代の女性たちの中に流れるカウガールの生き方を確信し、毅然と前向きに男たちと対等に西部に生きてきた牧場の女たちこそが、過去から現在に至るまで真にアメリカが生んだ独自の女性たちであることを立証しようと試みたのである。

ジョーダンは6万キロに及ぶ西部各地の旅と100人以上の実在するカウガールの取材を通して、西部に生き続けるカウガールズたちの存在を、自ら撮影した写真を添えて、生き生きと写し出すことに成功した。多くの女性のライフヒストリーは、ひとりひとりの言葉を忠実に再現しようとするジョーダンの努力によって生命を与えられ、読者はまるで直接彼女たちに向き合っているような印象すら受ける。過去と断絶することなく、むしろ過去からのたゆまぬ連続性を強調することによって、西部史を彩る女性たちに確固たる一つのジャンルを付した点で、ジョーダンの貢献は評価されてしかるべきであろう。

このアンソロジーのなかには、彼女の2作目の著作である自伝 *Riding the White Horse Home: A Western Family Album* (1993年) からの抜粋である"Bones"が収録されている。

西部の牧場に生きる人間にとって、落馬事故などによる骨折は日常的な出来事である。そうした生活に密着した困難には難無く耐えることができるが、母の死を通して、感情的な困難を克服できない牧場人の心情を描いた作品である。この小編の最後に骨にこだわり続けるジョーダンの興味深い観察が記されている。

There's a stark beauty to bones, bleached white by the sun. Bones are as hard as rock and as fragile as rock. They crack, fissure, shatter, and as they wear to dust, they take us with them, both column and conduit of our own evolution. In the bloodline drawn by landscape, all bones are ancestral. (3)

『太陽に晒されて白くなった骨には力強い美

しさがある。骨は岩のように固く、岩のようにもろい。ひびが入り、割れ、砕け、ちりとなる時には、我々の進化の支柱であり管である骨は、我々を伴っていくのだ。景観に形成される血統の中では、全ての骨は先祖である。』

西部の景観によって形作られる牧場人の血統の中では、周辺に散在する動物の残骨もすべてが先祖である、というジョーダンの認識に、土地と一体となって生きるカウガールの真骨頂を見るのは私だけではないだろう。

3．鞭打たれて文明世界へ―先住民族インディアン女性の苦難の道程

この作品集には、3編の先住民族インディアン女性の作品が含まれている。ここではすでに小説家、詩人として評価の高いレスリー・マーモン・シルコを除いて、ジャネット・キャンベル・ヘイルとメアリ・クロウ・ドッグに焦点を当てたい。

"Transition" 『転換』～ *Bloodline* 『血統』より

キャンベル・ヘイルはすでに2冊の小説を上梓し、ノーベル賞作家トニ・モリソンにその才能を高く評価されている。ヘイルの母方の祖先はオレゴン（テリトリー）の父と称される白人のジョン・マクローリン博士であるが、キャンベルという姓は父方の曾祖父のインディアン名コルマンネーに由来するという。10歳になるまでの大部分をアイダホ州北部のクールダレーヌ・インディアン居留地で過ごしたヘイルは、各地の学校を転々とした後カリフォルニア大学で学位を取っている。他の多くの先住民族インディアンたちと同様、ヘイルも先祖の土地を追われて都市に生きる極貧のインディアン女性としてサンフランシスコで十代後半を過ごした。

自伝『血統』から抜粋された『転換』と題された一節は、白人男性と結婚し子供を設けたあとに、夫の暴力を逃れてサンフランシスコで生きる10代の母ヘイルの自立に至る苦闘の日々の記録である。

60年代後半のヒッピー文化全盛時のサンフランシスコは、アメリカ的価値観すべての否定からはじまる若者文化の中心地でもあった。そうした自由な都市の中での人間の匿名性は、ヘイルのように偏見と差別の中で少女時代を送ったインディアン女性にはまさに転換を計るのに最適な環境だったと言えるのかもしれない。

しかし月額わずか145ドルの生活保護費は、親子二人の生活をまかないつつ自立をはかるにはあまりに少なすぎた。95ドルはアパートの家賃に、そして息子の託児所に週7ドルを支出すると、手元に残るのはひと月わずか28ドルだったとヘイルは述懐する。食費、衣服代、交通費その他もろもろをこの中から支出しなくてはならない。福祉政策の一つであるフードスタンプすら、25ドル食費に使うと100ドル分のフードスタンプが支給されるといった条件のもとでは、受け取ることもできない程の極貧の暮らしだった。

ある日、ヘイルは隣人からサンフランシスコ市立大学に21歳以上であれば高校中退者でも授業料免除で入学できる制度が存在することを知らされる。数ヵ月でその年齢に達するヘイルはすぐさま試験を受け、優秀な成績で入学を許可される。しかし生活保護だけでは進学できないと知って、息子を伴って、父とともに少女時代を過ごしたアイダホのクールダレーヌ居留地を訪れる。部族の長に大学進学のための奨学金支給を願い出るためである。

成人してから初めて訪れた故郷とも言える居留地で、ヘイルは初めて自分自身の血統を、大地とのつながりを、そして北米の白人社会化に先だって存在した先住民族のルーツを実感する

のである。部族の長から600ドルの教育資金の約束をとりつけ、サンフランシスコに戻る時、両親は乏しい蓄えの中から100ドルの現金とスミスコロナのタイプライターをヘイルに贈る。

大学の一年目はヘイルにとって厳しい試練の年となった。部族はその試練の年を支えてくれたが、それは我々が考えるようなものではなかった。約束された600ドルは届かなかった。しかし、それを待ち続けることによって、ヘイルは大学の1年目を乗り切ることができたと言う。もし月に145ドルの生活保護だけだとわかっていたら、決して進学など最初から考えなかったと。

後になって、部族には約束した時点でその資金調達のめどはなかったことを父の古い友人から知らされたヘイルは、次のように述べる。

They didn't want to tell me there wasn't any money. They didn't want me to give up hope. I told him I would never have made it without that hope. (4)

『彼等は資金がないことを私に知らせたくなかった。私に希望を失わせたくなかったのだ。その希望がなかったら私は決して頑張れなかっただろう、と私は彼に伝えた。』

ヘイルの自立の第一歩を支えたのは、部族の守られなかった約束と、その約束を信じて必死に生きた21歳の母ヘイルの明日への希望だったのである。トニ・モリソンが称賛したように、この一節でもヘイルは平易な語り口の中に、読者を引き込んでいく天性のストーリーテラーの片鱗を見せ、26編の収録作品の中でも秀逸の作品になっている。

"Civilize Them with a Stick" 『むちで彼らを文明人に』 ～ *Lakota Woman* 『ラコタ族の女』より

ジャネット・キャンベル・ヘイルの作品が、流浪の都市住民としてのインディアン女性の自立の軌跡を描いているとすれば、メアリ・クロウ・ドッグの『むちで彼らを文明人に』は強制的に白人化させるために教育施設に送り込まれたインディアン女性の告発の物語である。クロウ・ドッグはサウス・ダコタ州のローズバッド居留地の上水道も電気もないひと部屋だけの小屋に父なし子として生まれた。第二次「ウーンデッド・ニー」事件の最中の1973年、17歳で最初の子を生み、その後非合法化されていたゴーストダンスを現代に蘇らせたメディシンマン－祈祷師－のレオナード・クロウ・ドッグと結婚した。(5) 一貫して白人の圧政に対する告発を試みるメアリの反逆は、セントフランシスのカトリック寄宿学校での少女時代にすでに始まっていた。

ここに掲載されたのは、1990年に出版された彼女の自伝『ラコタ族の女』からの一節である。ある日突然、自分たちの肉親や部族から引き離され文明世界に生きる人間となるべく寄宿学校に送られるインディアンの子供たちの経験を、クロウ・ドッグはナチスの強制収容所の犠牲者に例える。スー族の伝統的な大家族制度の中で育った子供たちはある日、突如バスでやってくる白人たちによって家族と引き離され、寄宿学校に送られる。誘拐に近いやり方でメアリが送られてきたカトリックの神父とシスターたちが運営する学校は、20世紀初頭の設立以来、建物も食事も教師の質もそしてその教育方法も何一つ変化のない学校だった。

こうしたインディアン同化政策推進のための学校は、19世紀にインディアン撲滅作戦の指揮をとった合衆国軍司令官たちと意見を異にする白人の、いわばインディアンの理解者たちによって建てられた。しかし、メアリは彼らの本当の意図を次のように書いている。

"You don't have to kill those poor benighted heathen," the do-gooders said, "in order to solve the Indian Problem. Just give us a chance to turn them into useful farm-hands, laborers, and chamber-maids who will break their backs for you at low wages." In that way the boarding schools were born. (6)

『インディアン問題を解決するために、この哀れで愚かな異教徒たちを殺す必要はない。彼らを役に立つ農場の働き手や、労働者や、女中に変えるチャンスを我々に与えてくれればいいんです。彼らは低賃金で白人のために懸命に働くようになるんです。』とインディアンへの慈善家たちは言った。そうして寄宿学校は誕生したのだ。

殺すよりは生かして利用する、という白人の意図で作られた学校がインディアンの子供たちにどのような教育を与えたかを察するのは容易である。生まれ育った言語、社会、文化、宗教を徹底的に否定され、白人化の思想教育の中で長い時には10年近くを過ごした人間の多くがインディアンとしてのアイデンティティを失い、白人の思想にも馴染めず社会の敗者として埋没していく様を、クロウ・ドッグはこの同化教育の当然の帰結とみなす。

自分の祖母も母も送られた同じ学校で過ごした日々を、クロウ・ドッグは詳細に記していく。起床からの一日、軍隊さながらの厳しい規則の中で、容赦なくむち打ちの罰が少女たちを見舞う。1年生として送られてきたいたいけな子供たちは、何の心の準備もないままにお下げ髪を切られ、アルコール風呂に放りこまれる。学内で常に強い反抗心を示し続けたクロウ・ドッグは仲間とレッドパンサーというアンダーグラウンド新聞を発行し、人種偏見主義者の校長を告発する。

ついに教師と衝突して退学するまでの日々を綴るクロウ・ドッグのペンから、セクハラ、差別、偏見に満ちた教師に真っ向から立ち向かっていく中で、その後の闘争家クロウ・ドッグの原型が形成されていく様子を読み取ることができる。

ヘイルの作品が、一個人の自立の物語として未来への光明を感じさせるのに対して、クロウ・ドッグは先住民族に対する白人への同化政策の道具としての教育を強要された子供たちの怒りを代弁して、読者はその怒りに圧倒されてしまう。どのような歴史書を読むよりも、彼女たちの肉声の中にこそ、否応無く強者の支配のもとに置かれた西部の先住民族の女性たちの真実の姿が存在することを改めて認識させられる。そして、彼女たちの物語に共通する天性のストーリーテラーとしての高い資質に、豊かな口承文学の伝統をもつ民族の血を感じると同時に、西部という地域に今だ存在するであろう数多くのヘイルやクロウ・ドッグの声にさらに耳を傾けていきたいという思いを強くするのである。

4．姉妹妻 ― モルモン女性の呪縛からの自立

東部から大陸を横断して西部に定住した白人のグループの中で、その宗教信条のために常に特異な文化的地位を与えられたのがモルモン教徒である。ブリガムヤング率いるモルモン教徒たちが東部での迫害を逃れてユタのグレートソルトレーク周辺に定住したのは19世紀中葉のことである。政教一致の考え方や多妻婚のゆえに、他のキリスト教徒からは決して受け入れられる事のなかった彼らは、勤勉さと強い集団帰属意識に支えられて、独自の強固な地域共同体を作り上げていった。

このアンソロジーには3人の現代のモルモン教徒の家庭に生まれた女性の作品が含まれている。中でもドロシー・オールレッド・ソロモン

の、今だに色濃い秘密に満ちた宗教習慣と家族の絆の間で揺れながら、なお自立の道を探るモルモン女性の葛藤を正面から見据えた作品"Sister-Wife" 『姉妹妻』は、そのテーマのゆえに我々に衝撃を与えずにおかない。

ソロモンはモルモン原理主義と呼ばれ、今だに多妻婚を実行する一族の48人の子供の一人として生まれた。父のルロン・オールレッド博士は医者であると同時にモルモン原理主義の指導者であり、後に過激派に殺害された。母は博士の7人の妻の一人だった。多妻婚は1890年にモルモン教会でも正式に禁じられている。原理主義家庭は秘密裏に一夫多妻を現代に実行するわけだが、ひとたび当局に発見されると、家族は周辺の州に分散、逃亡するのである。しかし家族の秘密は他の世界を徹底して遠ざけ、結果として家族は再び集合するのが常だった。「後年、私は多妻婚の原則と無関係の場合でも、真実を語るのは難しいということを学んだ。」とソロモンは述懐する。やがてモルモン原理主義を離れたソロモンは、この閉じられた世界に存在する愛や精神性とその限界に関する真実を語り始めたのである。

『姉妹妻』は、ソロモンの異母姉妹アルマの物語として語られる。アルマは実姉カレンがすでに結婚している男性アンソンの三番目の妻、すなわち姉妹妻（sister－wife）となって同じ家に一室を与えられる。この閉じられた宗教世界では姉妹が同じ男性と結婚し、産まれた子供を共同で育てるのは特異なことではなかった。ソロモンの母もその双子の姉妹もソロモンの父と結婚し、まるでシャム双生児のように寄り添って生きた。一夫多妻制の社会は、女同士がすでに親しい関係にあるほうが、夫を共有するのも、子供を共同で育てるのも容易だという男たちの主張がまかり通る世界でもあったのだ。

モルモン原理主義の世界では女性のレゾンデートルは子供を産むことにあり、子供のできない女性は哀れみの対象とされ、まるで魔女のように扱われた。次々と子供を産む姉に対して、あらゆる努力にも関わらずアルマは子供を産むことがなかった。

姉カレンが9番目の子供を出産した日、カレンは生まれたばかりの女児をアルマに差し出し、あたかも自分の産んだ子のように育ててほしい－"As if she were your own."－と告げる。その瞬間アルマははっきりと真実を見るのである。

There is no "as if." It is, or it isn't.

She looks at her sister. There's no use pretending that she can do things Karen's way. ..On earth we must rescue ourselves, must reach with open arms to receive salvation. We must permit ourselves to be refined into something pure, something worth offering to God.

"Karen, thank you. But it wouldn't work." A surprising triumph lifts her voice and her heart as she speaks. She holds out the baby. "She's beautiful, Karen. But she's yours - yours and Anson's."

"But...but what will you do?"

"Live my life, Karen. It's precious - precious as that baby's."(7)

「あたかもなどというのは存在しないのだ。そうであるか、またはそうでないかだ。彼女は姉を見た。カレンやり方で物事をこなせると思い込むのは無駄なことだ。... この世では私たちは自らを救わなくてはならないし、両手を広げて救済を得ようとしなくてはならない。何か純粋なもの、神に捧げる価値のあるものに自分を磨いていかなくてはならない。

『カレン、ありがとう。でもそれは駄目よ。』口を開くと、打ち克った気持ちが声も心も高揚させた。アルマは赤ん坊を掲げた。『美しい赤

ん坊よ、カレン。でもこの子はあなたのものよ。あなたとアンソンのね。』

『でも.. でもあなたはどうするの？』

『わたしの人生を生きるのよ。あの赤ん坊の人生と同じくらい大切なね。』」

姉からの愛の贈り物であるはずの子供を拒否することによって、アルマはこの閉じられた世界から一気に解き放たれていく。子供を産むことが存在のすべてというモルモンの女性の宿命の中で、いつかは子をという幻想を抱きつつ生きてきたアルマは、初めて呪縛から放たれて、真に自立した女性に生まれ変わる。そしてそれを支えたのは、天上の神とともに、ユタの大地と愛馬の存在であった。

現代の原理主義モルモン社会に生きる多妻婚の姉妹妻というセンセーショナルなテーマであることから、ソロモンは物語のすべての登場者を偽名にしている。他の多くの作品が無防備なまでに自伝的色彩が濃いことを考えると、この社会の特殊性を一層きわだたせる結果となった。しかし、歴史的に見ても、モルモン社会はアメリカ西部のまぎれもない一部であり、この例外的な部族社会に生きてきた女性たちもまた西部という風土が生み、育てた女性たちであることは疑いの余地がない。ソロモンはこの作品で、環境の特異性よりはむしろ現代女性の自立の物語としての普遍性を強調することによって、読む者の共感を得ることに成功しているといってよいだろう。

5.「希望」という名の精神世界 ― *"Getting to Hope"* より

The Stories That Shape Us に収められた作品の多くが、自伝的要素の強いものであることは先に述べた。二人の編者の作品選択の狙いも西部という地域の多様性を、あらゆる背景の女性たちの文章を通して豊かに浮かびあがらせ、増幅させようとするところにあることも明らかなことである。

そうした作品群の中で、キャスリーン・ノリスの『ホープに向かって』は、ダコタの小さな長老派教会を中心とした住民と土地の結びつきを通して、大西部の精神世界を表出することに成功している。

ノリスは1971年の *Falling Off* と1981年の *The Middle of the World* の2冊の詩集ですでに名をなした詩人である。"Getting to Hope" は1993年に出版された彼女の初めてのノンフィクション集である *Dakota : A Spiritual Geography* に収められた作品の一つである。民間人牧師としてホープに赴いたノリスは、ホープ教会の教会員である農民や酪農従事者と、食物を生産するだけではなく彼らの魂をも癒す大地との精神的結びつきを、温かいまなざしで見つめる。

西部の名もない農村の慎ましやかな生活に存在する豊かな精神性、土地への愛着、過去と現在そして未来をつなぐ伝統を謳うこの作品は以下のような書き出しで始まる。

"Getting to Hope" 『ホープに向かって』 ― *Dakota* 『ダコタ』より[8]

「ホープに行くためには、サウス・ダコタ州ケルドロンでハイウエイ12号線を降り、南に向かう。簡単に見逃してしまいそうだが、ホープの町はガソリンスタンドが一軒と手入れの行き届いた住居の付いた雑貨店、それにケルドロン在住のキャミー・ヴァーランドが1987年のサウス・ダコタ州ミスティーンに選ばれたことを示す看板ぐらいしかめぼしいものはない。

砂利道の区画道路に入って右側に木製地図を探すといい。ビジービーバーズ4Hクラブが立てたこの看板は、かつて南海の島人が航海の目的のため作った貝とより糸と竹でできた謎めい

たでもわかりやすい雰囲気の地図によく似ている。このケルドロンの地図は名前と数字が書かれた木片でできている。ピーターソン８Ｓ４Ｅ１Ｎは、ピーターソン牧場に行くには、南に８マイル、東に４マイル、そして北に１マイル運転することを意味している。

ホープ（13Ｓ）と書かれた小さな金属製の標識は、立っているかもしれないし、倒れているかもしれない。風が倒してしまうと、だれかが気がついて立て直すのに時間がかかるからだ。しかし、道を尋ねる必要はないだろう。まっすぐ南に向かい、道なりに西に90度曲がり、また南に90度曲がると、もう１マイルかそこいらだ。

10.5マイルを過ぎると、ふたつめの丘の上からこれから行く場所を見渡すことができる。50マイルにわたって眼前にひろがる大地の中のちいさなを。夜になると、南方45マイルにあるサウスダコタ州イザベルと南西に同じ距離に位置するバイソンの町の明りが見える。

グランド川の堤防が見える。茶便箋のようにくしゃくしゃの土地だ。川はプレーリーに刻まれた深い渓谷の底に横たわり、砂岩が朝日に輝いている。パハ　サンカワカン　サパ、別名ブラックホースビュート、は川の南の地平線を静かにおおっている。

道すがら、何軒かのつつましい家と牧場の建物を通りすぎるだろう。使われているものもあれば、廃屋もある。一番最近手放されたのは、古典的な二階建ての農家で、窓には木片がうち付けられ、周囲に巡らされた柵は雑草におおわれている。何年も放置されているので、窓はすべて壊れ、屋根のふき板もほとんどなくなっている。1930年代に植林された防風林は今や枯れ木が林立しているだけだ。今に木がすべて倒れると家屋は風で傾き、そして倒壊するだろう。しかし、それは先の話だ。

ホープで仕事をしている他の人々と同じように、わたしも誰が、そしてなぜその家から去ったかを知っている。廃屋を通りすぎる度に、その家々の住人たちのことを思い出す。「ホープ長老派教会はサウス・ダコタ州の平原にぽつねんと建っている。」と教会史には書かれている。しかし、それが教会を語る手始めではない。ホープ教会は、15年前の教会員数46名から現在はその数25名に減り、教会員は30マイル四方の牧場に散在している。数の減少は、農家の老齢者の退職、そして都市部への移動、若者の流出によるものである。

ホープ教会はセイヨウトネリコの木とチョークベリー、スノーベリー、バファローベリーの茂みのある小川のほとりの牧草地に建つ目立たない建物である。日曜日の礼拝に教会員のほとんどが集まった時でさえ、それはたいした場所には見えない。しかしここは私の知る最も成功している教会なのだ。コーソン郡南西部のグランドバレー、リバーサイド、ローリンググリーンといった町から通う９人の子供達のための教室一つの学校として使われているセンタースクールと共に、ホープ教会は周辺に住む人々にある種の自立性を与えている。

『どんな宗教でもかまわないんです。』と長年の教会員は言う。『ルーテル派の人もカトリック教徒も、ホープ教会は大切だと言うし、もっとそうなりつつある。ホープは地域全体の唯一の教会なんです。』ホープ教会の前の牧師はこう言う。『それが何であれ、牧場の身売りであれ、葬式や結婚式であれ、ホープ教会はその地域に起こったことの一部だった。』この言葉は、毎年行われる子供のための休暇中の聖書学校にルーテル派やカトリックの子供たちが参加していることからも裏付けられる。

現在の教会は古い納屋のセメントの土台の上に1961年に教会員たちによって建てられたものだ。しかしそのルーツは1916年、人々がホワイトディアやグラッドバレーといった小さな集落のダンスホールで日曜礼拝のために集まった頃

にさかのぼる。『教会は馬と馬車の時代にはそれほど定期的ではなかったんです。』と教会の年老いたメンバーの一人が言う。教会創立者の一人だった人の息子だ。『マッキントッシュやサンダーホークの牧師が巡回牧師として来てくれた。ここにくるのに半日がかりでね。』.....（中略）」

ノリスはしかしこの小さな教会とその教会員を過小評価するなと私たちに警告する。教会員のほとんどが大学出身者であり、彼らは世界情勢に精通し、農業問題には言うまでもなくきわめて詳しい。教会員の数が半数近くに減少したにもかかわらず、ホープ教会はサウス・ダコタ州の長老派教会の中で、ミッションに対する一人あたり献金額はトップに近い。何事も地球規模で考えるのがホープの長年の伝統なのだ。ある農場主の3人の娘はシドニー、パリ、ローマ、ブリュッセルで数年教会活動に従事した。1950年代、60年代に中国で宣教師として働いた従姉妹たちがいたおかげで、世界は自分たちの住む世界よりずっと大きい事を幼い頃から知っていたのだという。

地球的視野を持ちつつ、土地にしっかりと根差して生きるホープの人々をノリスは感謝の心が深い人々と評する。土地に根差す感覚を再びノリスの文章から訳出してみよう。

「土地を意識することはダコタ西部では避けられないことだ。そしておそらくそれが世界へのわれわれの贈り物なのだ。おそらくそれが多くのアメリカ人がわれわれを無視しようとする理由なのだ。この社会では上昇指向は美徳とされる。常に上昇し続けなくてはならなくて、見返りを得られない場所は離れていかなければならないのであれば、土地などはさしたる問題ではないという態度をとったほうがいいのだ。しかし、ケルドロンの南に位置するホープ教会は実在する場所であり、神聖な場所なのだ。教会を最初に見た時にそのことを知るだろう。広大な大地のなかの小さな建物。ドアから足を踏みいれる時に知るだろう。プレーリーの現在の場所から決して動かすことができないのを。もちろん、物理的にもだが、それは重要なことではない。

ホープの人々は伝統的な、田舎の人々である。そして彼らはある土地の精神は移動したり、置き換えたりできないことを知っている。彼らは、年を追うごとに都市化していくアメリカ文化の主流とは離れて、長年この地に住んできた2代目、3代目、そして4代目のアメリカ人たちである。ホープの人々は自分たちの土地と一つになって生きてきた。これはロマンティックなことではなく、真実なのだ。それは、人々が土地のことを "I'm so dry I'm starting to blow." とか "I'm so wet now I'll be a month to seeding." というように第一人称で話すその話し方のなかに聞きとることができる。.....（中略）

私はかつてローズバッド・スー族出身の監督派の牧師であるマーティン・ブロークンレッグ師が先住民族と白人文化の文化ギャップについてルーテル派の牧師からなる聴衆に演説するのを聞いたことがある。『ある種の文化ではゴーストは存在しない。』と師は言った。そしてこう付け加えた。『彼らは時が存在すると思っている。』神経質な笑い声が会場から起こった。その発言が我々に向けられたことを知ったからだ。アメリカでは時は大切だ。まさに時は金だ。ゴーストなど意味がなく、土地に対する執着もない。しかしホープ教会はその存在自体で土地は重要であること、土地にはそれ自体意味があることを示している。.....　ホープは小さく、息絶えかけているが、でも美しく生きている。ほとんどの人が血縁であるという意味では、部族的であるといえるが、決して自分たちと異な

る人々を恐れたり忌み嫌ったりするような、息が詰まるような閉塞感と同義の部族主義とは無縁である。...」

ノリスはこの物語の最後を次のようなエピソードで締めくくる。ホープに赴任してきた民間人牧師の一人が、最初の葬式を執り行った時の事である。墓地での葬儀の際、列席していた男たちが地面に掘られた棺を納めるための穴を調べ始めた。

It was early November, and someone explained that they were checking the frost and moisture levels in the ground. They were farmers and ranchers worried about a drought. They were mourners giving a good friend back to the earth. They were people of earth, looking for a sign of hope. (9)

「季節は11月の始めだった。彼らは霜と地中の湿度の程度を調べているのだと誰かが説明してくれた。彼らは干ばつを心配する農民や、牧場主たちなのだ。彼らはよき友が大地に還るのを見送る人々だった。彼らは希望の兆候を求める、大地の人々だった。」

アメリカ文化の主流が急速に都市化していく中にあって、西部の大平原にぽつねんと存在する教会を中心とする地域社会の普遍性をこころからの愛を込めて書き綴る筆者の熱情に心打たれない読者はいまい。それと同時に北海道に生きるものとしては、110年前に同じ長老派の宣教師として北海道に根を下ろしたサラ・クララ・スミス女史の心象風景の中に、日本のフロンティア北海道の大地の持つ精神性がどれほどの勇気を与えたかをおのずと推し量ることができたのも、このストーリーの持つ普遍性を示すものであることを付け加えておきたい。

6. 結びにかえて

本論では、現代のアメリカ西部に生きる女性作家たちの作品集の中から、特に印象深かった作品を中心に紹介してきた。この他にも、同じアジア人として共感を禁じ得なかったアジア系女性のアメリカ文化の主流との出会いを描いたキャスリーン・ティアウの『白人色の都市』や、自然を極端に恐れる黒人女性の心理を、黒人のアメリカ国内での歴史的背景を通して語ろうとするイヴリン・ホワイトの『黒人女性と荒野』、なんの変哲もないカリフォルニアの小都市バニングに西部特有の歴史のパワーゲームの凝縮された姿を描いた新西部史の旗手パトリシア・リメリックの『増幅されたバニング』など、取り上げたい作品が多くあったが、次の機会を待つこととした。

このアンソロジーに収められた作品の多くに共通するのは、彼女たちが人種や宗教、生まれ育った地域の違いこそあれ、それぞれが自分の属するある種の部族社会－tribal family－の一員であるという事実である。そしてそれぞれがどのように自立していったかを語る、自立のプロセスの物語なのである。

先住民族であれ、モルモン教徒であれ、アジア系、ヒスパニック系アメリカ人の社会であれ、東部から移住してきた白人の社会であれ、西部の自然と対峙する人間社会は家族という社会の最小単位を中心に形成されてきた。であればこそ、彼女たちがそれぞれ固い結束の部族社会から巣立っていく時に、その自立の過程に家族との相克を含めてどれほどの痛みを伴ったかを想像するのは難くない。読み進むうちに、彼女たちの自立に向けて放出されたエネルギーが、塊となって読者を包むのが感じられる。そしてそのエネルギーの根源はすべて西部という大地にあることに気づくのである。

人間を育み、形作る西部ーさまざまな異質の集団を抱え込んで許容するこの地があってこ

そ、西部の女性たちの、どのような逆境にあっても希望を失わず前向きに生きる姿勢が形成されたことを再認識させられる。その精神世界を雄弁に語る一枚の写真がある。1890年のスー族インディアン終焉の地となったサウス・ダコタ州ウーンデッド・ニーのパインリッジ・インディアン居留地の荒野に建つ、白い尖塔を持つ小さな教会の写真である。見渡す限りの大草原の中心にあって、自然界すべてに魂が宿ると考えた先住民族たちのゴーストも、アメリカ人たちの「時」もすべてを包みこんで、西部の空間と時間の只中に存在する白い板張りの簡素な教会は、その地に生きた人々すべての魂の礼拝堂のように思えてならないのだ。 The Stories That Shape Us に編まれた26の作品を通して、彼女たちが幾重にも織りなすアメリカ西部の物語すべての中の魂の礼拝堂のように思えてならないのだ。

紹介した作品について

The Stories That Shape Us: Contemporary Women Write about the West. ed. Teresa Jordan & James Hepworth, W.W.Norton, 1995, pp.393

"Bones," from *Riding the White Horse Home*, by Teresa Jordan, pp.176-188

"Transitions," from *Bloodline*, by Janet Campbell Hale, pp.130-144

"Civilize Them with a Stick," from *Lakota Woman*, by Mary Crow Dog, pp.90-103

Sister-Wife, by Dorothy Allred Solomon, pp.344-363

"Getting to Hope," from *Dakota*, by Kathleen Norris, pp.262-277

Notes

(1) cf. Kayoko Yoshida, "Learning New Western History in Asia-An Approach at 1995 Hong Kong Summer Institute in American Studies-," Journal of Hokusei Jr. Col. Vol.32, 97-112, 1996（吉田かよ子「アジアで学ぶアメリカ新西部史」北星学園女子短期大学紀要32号、1996年）での新西部史に関する記述参照。

(2) cf. 吉田かよ子「Western Women-Their Land, Their Lives- アメリカ西部開拓史に埋もれた女性たちの実像を求めて」北星学園女子短期大学紀要28号、1992年、および吉田かよ子「アメリカ西部に生きた女性たち－Women of the West」同31号、1995年、pp15－27を参照。

(3) "Bones," Teresa Jordan, p.188

(4) "Transition," Janet Campbell Hale, p.144

(5) 1890年のスー族大虐殺の場であったサウス・ダコタ州ウーンデッド・ニーで、1973年全米インディアン運動（AIM）の指導者たちが白人を人質に3ヵ月間にわたってたてこもり、全米に衝撃を与えた。これを第二次ウーンデッド・ニー戦争と称する。

cf. ジョン・コスター「この大地、わが大地」(1977) 清水知久訳、1-481、三一書房

(6) "Civilize Them with a Stick," Mary Crow Dog, p.93

(7) "Sister-Wife," Dorothy Allred Solomon, p.362-363

(8) "Dakota," Kathleen Norris, pp.262-277

(9) Ibid. p.277

A Selected Bibliography

Jordan, Teresa, (1992) Cowgirls:Women of the American West, 1-309, University of Nebraska Press, Lincoln and London

Riley, Glenda, (1988) The Female Frontier: A Comparative View of Women on the Praire and the Plains, 1 -299, University Press of Kansas

Silco, Leslie, Marmon, (1977), Ceremony, 1-262, Penguin Books USA

Ward, Geoffrey C., (1996) The West, An Illustrated History, 1-445, Little, Brown and Company, Boston, New York, Toronto, London

Kingston, Maxine Hong, (1976) The Woman Warrier:Memoirs of a Girlhood Among Ghosts, 1-209, Random House

ジョン・コスター「この大地、わが大地」(1997) 清水知久訳、1-481、三一書房

Patricia Nelson Limerick. (1997) "Reassessing Continuity in Western American History," a keynote address presented at the Japanese Association for American Studies, June 7, 1997